

乳幼児のおむつと環境

勝 木 洋 子

文化環境学大講座

Baby's diaper and Environment

Yoko KATSUKI

The Correlation for Environment and Humanity for Policy and Technology

School of Humanity for Environmental Policy and Technology

Himeji Institute of Technology

Abstract

Use of a disposable diaper has increased in recent years. In my research, if 1996 are compared with 2001, use of a cloth diaper will become below half and 90% will use the disposable diaper in child-rearing. An infantile excretion custom is important, when attached for seeing a social rule. Furthermore, it was explored how the childcare person would feel parents' bringing-up attitude. Then, the material of the history of a disposable diaper, the background of a society with fewer children, a child's health, excretion, the environment where a child grows and a cloth diaper, and a disposable diaper, the processing after use, the influence on earth environment, etc. focusing on growth of a child.

I. はじめに

おむつは新生児が生まれてすぐ必要になる育児用品であるが、今日までの子育てで使用されてきた布のおむつは、近年急激に紙おむつへと移行してきた。

一世帯の子どもの数が減り何度も使いまわすことなくなった布おむつは、子育ての現状として育児用品から遠い存在になりつつある。

平成2年国民生活白書では紙おむつの生産量の急増が報告され、平成4年国民生活白書では、「女性の職場進出が進む中、経済のサービス化の流れとあいまって、育児と勤労を両立するための保育サービスの必要性がますます高まり、子どもにかかる養育費は増加した。子どもは生産財から高級消費財に変わってきている。」と報告されている。紙おむつは親や保育するものにとって、もれない、むれない、コンパクト、使い捨てなどと利便性は高い。しかし、乳幼児の発育発達や親子の関わりに本当によい影響を及ぼしているのか、親からのしつけによって排泄習慣と社会のルールを習得していく過程として考えられているのか疑問である。

育児の歴史の中で見てみると、今日はゆっくり、子ども主導のもとで、排泄訓練を開始するというのがアメリカ、フランス、イギリス、日本の子育てに共通している。

(恒吉, 1997) 子どもが排便、排泄を自分でコントロールでき、精神的に協力できるかを開始時期としている。

最近、健康相談や自然学校、修学旅行の場面で学童期の子どもにも夜の紙おしめが必要な事例にあたる。乳幼児だけが使用している現状ではないおむつを、歴史的にとらえ、少子化社会の子どもという価値、排泄習慣、おむつ交換などの保育・養育環境から、さらに私たちが次の世代に残す地球環境について、子どもを中心に考察を試みた。

II. おむつの歴史的背景

1. 布おむつ

布おむつは、人類が着物をまとうようになって出現したのであるという報告がある。(大野, 1984)

「おむつ」の「お」は接頭語で、「むつ」は「むつき」であり、「おむつ」は御襠褌となる。中国でいわれる「産衣」が襠褌(きょうほう)だといわれる。

しかし、現在の中国の子育てを見ていると、おむつをしている乳幼児は少ない。生後、半年頃から昼間起きている時間が長くなり、一日の生活のリズムも整ってくると、子どもはおむつをせず過ごしている。着衣のパンツの股下の縫い目が割れていて、尿意や排便を

もよおすサインをまわりのおとながよく観察し、さっと抱きかかえてさせたり、おまる(小児用便器)にかけさせたりして排泄をさせている。

近年中国は一人っ子政策がとられ、子どもを養育する6人のおとながいるといわれているが、1人の子どもの排泄にもおとながきめ細やかに関わっている様子を見かける。また、長期間おむつを使用しないので、子どもの排泄の自立は早い。

2. 紙おむつ

日本の紙おむつの歴史を社団法人日本衛生材料工業連合会の資料や、各メーカーの社史・沿革を基に年別に記述した。

1940年代半ばスウェーデンではドイツから経済封鎖を受け、綿花の輸入が止まり、極端な綿布不足となった。スウェーデン政府は、おむつを綿布から紙に移行するよう指導し、そこで考案された。

吸水性のある紙を重ね、外側をメリヤスの袋で覆った簡単なもから防水シートでカバーする形に改良されながら、北欧やヨーロッパ各国へと広がった。アメリカに渡った紙おむつは、多くの工夫と改良が加えられ、布おむつの代用品の域を脱し普及していった。

1945年頃(昭和20年代後半)に初めて紙おむつが発売された。紙綿を重ね布で包んだだけのもので、おむつカバーがなければ使用できなかった。外出時や、雨で洗濯できないときなどに限って使用される程度であった。

1960年代、日本ではすでに紙おむつはあったが品質が低かったことや、子育てに手抜きはしたくないという母親の意識が強かったため、布おむつを使用する人が主流であった。

1962年(昭和37年)、紙おむつより一足早く乳幼児用ライナーが発売された。当時の世帯収入から見ればまだまだ高価で、しかも使い捨ての習慣がない時代でもあり、広く普及するには至らなかった。

1963年(昭和38年)、肌に触れる部分には不織布が使われ、外側には防水紙が採用された、今日の紙おむつの構造と機能を持った最初の本格的な紙おむつが発売された。翌年、日本航空の国際線常備品に採用された。

1977年(昭和52年)米国から輸入のP&G社の紙おむつ、商品名パンパースを日本で初めて福岡県と佐賀県で発売(1979年から全国発売)したと記録がある。¹⁴⁾

輸入された紙おむつの構造は、立体裁断された腰の部分2ヵ所をテープで止め、おむつカバーとおむつの両方を兼ねている、テープ型という新しい形が出現した。

働く女性の数は1975年(昭和50年)1,170万人に、1980年(昭和55年)は1,350万人と増加した。当然、働く母親も増加し、家事の少量化として利用が進んだ。^{9) 10)}

1980年代、働く母親が増加したことや紙おむつの便利さが理解されはじめた。また、機能性も向上し消費経済の発展を背景に紙おむつの使用は高まった。この時期トイレットペーパーやティッシュペーパーを作っていた製紙メーカーは、続々と赤ちゃん用紙おむつを量産するようになった。1980年大王製紙、1981年ユニチャーム、1983年花王、などが販売をはじめた。(1987年王子ティッシュ販売株式会社は紙おむつの販路展開に株式会社ネピアと社名を変更した。2003年現在、王子ネピア株式会社)^{12) 13) 15)}

1984年(昭和59年)高分子吸水材が紙おむつに採用された。高分子吸水材は、高吸水性樹脂(Super Absorbent Polymer)と呼ばれ、1974年(昭和49年)に米国で開発された。高分子吸水材の採用で紙おむつの性能が向上した結果、とりかえ回数が減り、1982年(昭和57年)に一日平均7.7枚使用していたものが1990年(平成2年)には1日の使用枚数5.5枚へと減少していった。

高分子吸水材の最大の特長は高い吸水性と保水性である。純水で自重の200~1000倍、尿の場合でも30~70倍と、極めて高い吸水能力を持っている。また、高分子吸水材が一度吸水した水分は、外から多少の圧力がかかってもほとんど放出しないなど、高い保水力も併せ持っている。尿もれ・尿の肌への逆戻りも大幅に改善され、購入時に持ち運びが容易になり、ゴミに出される容量も大幅に減らした、装着感が向上し動きやすくなったなど多くのメリットがある。

このような紙おむつ台頭の初期には「紙おむつはおむつかぶれの原因になる」「紙おむつは排泄の自立を遅らせる」など、紙おむつに批判的で、「自分が楽をするために赤ちゃんを犠牲にする」という非難の声が多かったが、1980年中頃、皮膚生理の上からも排泄自立の上からも問題がないという小児科医の意見や、また産院で配られる紙おむつに何の疑問も持たずに使用する親が増え、広く社会に認知された。(丹羽, 1999)

1990年(平成2年)パンツ型紙おむつが出現した。一体成形した形で、ギャザーで体にフィットし幼児が立ったまでもま交換でき、かさばらない。

Ⅲ. 少子社会から見たおむつと子育て

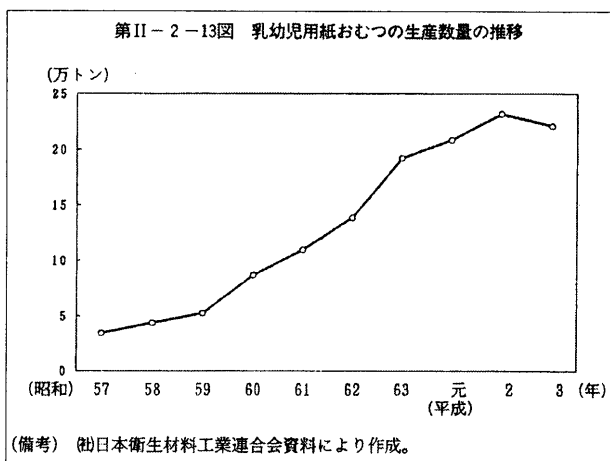
平成4年11月13日、経済企画庁発行の平成4年国民生活白書は「少子社会の到来、その影響と対応」という題

である。

第Ⅱ部 景気減速下の家計の動向と最近の子どもを巡る消費動向、第2章 子どもを取り巻く消費の動向、第2節 子ども関連消費を牽引するもの、という中では、(未就学の子どもを持つ世帯で教育費以外に費やす割合が高い)「(中略)特に未就学の子どもがいる30歳前後の親の世代は高度経済成長期以降に育ち、比較のおしゃれで豊富なものに囲まれた時代を過ごした世代であり、親が身につけたファッションセンスを小さな子どもに注ぎ込むといったこともありうるものと思われる。」(国民生活白書, 1992)

「(中略)なお、養育費が全消費支出に占める割合は俗に「エンジェル係数」と呼ばれているが、当庁「平成4年度国民生活選考度調査」による「エンジェル係数」は、大まかな平均で子ども1人世帯で16~17%程度、子ども2人世帯で24~27%程度となっており、子どもにかかる養育費は決して少ないとはいえない。これには様々な背景が考えられるが、一つには、子どもの存在が昔のように労働力としてとらえられるのではなく、その成長や愛すること自体が楽しみであり喜びでもあるという意味で、いわば生産財から高級消費財に変わってきているという面もあるものと思われる。」(国民生活白書, 1992)

(女性の職場進出と保育需要の多様化)では、「女性の職場進出が進む中、経済のサービス化の流れとあいまって、育児と勤労を両立するための保育サービスの必要性がますます高まっている。(中略)さらに、乳幼児用紙おむつの生産数量の推移をみると、第Ⅱ-2-13図に示すように昭和60年代に入ってから急激に伸びている。



なお、これは重量トンベースのデータであるが、紙おむつはうす型化も進んできており、枚数ベースにするとより増加している可能性もある。このように、紙おむつの生産数量は子ども数の減少にもかかわらずおむつ増加傾向にあり、まだ普及拡大期にあると考えられる。」

(国民生活白書, 1992)

日本の経済発展、女性の社会進出とともに紙おむつは進化していった。しかしそこで、育児用品の開発で便利なものが増えているにもかかわらず、子育てに対する不安を訴える女性が増加している。当時総理府の調査によれば、子どものしつけ等に関して不安を感じたことがある割合は、乳児・幼児・小学生いずれの親においても過去10年で増加している。国民生活白書には「子育て不安が増えている」と記述されている。⁸⁾

Ⅳ. 保育・養育環境から見た排泄、排便について

保育所保育指針は、乳幼児が生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす保育所での指針である。

保育所保育指針から、排泄習慣と社会のルールを習得していく過程としてみるために、排泄、排便に関連ある事項を取りだし、乳幼児の発育発達とおとなの関わりが及ぼす影響として検討した。

保育所(園)は子どもが健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意し、自己を十分に発揮しながら活動できるようにすることにより、健全な心身の発達を図るところにある。

1. 保育の原理、(1)保育の目標の中で6つ掲げられている項目のうち、排泄、排便についての事項は、イ健康、安全など生活、ウ人との関わり、カ様々な体験を通して、の中3項目が関連している。

同じく(2)保育の方法は9項目あり、ア子どもを温かく受容し、イ子どもの発達についての理解、ウ子どもの生活のリズム、エ子どもの主体的活動や体験、などの4項目が関連している。(保育所保育指針 第一章 総則より)

子どもとおとなの関係では、相互作用によって情緒的に安定し、おとなの期待に自ら応えようという気持ちが育ち、次第に主体的に活動するようになる。自分の気持ちを明確に表現し、自分の意思で何かをするようになる。このように発達初期に自分の行動を認めてくれるおとなと相互関係を持つことにより、その後の一層の発達が促される。

信頼できるおとなとの関係が子どもの発達を促し、能動的、意欲的に活動ができるようになることなど、おとなとのコミュニケーションの大切さが書かれている。(保育所保育指針 第二章 子どもの発達 より)

産休明け保育は生後2か月以降から保育所での生活が始まる。親にとって不安があるが、6か月未満児の保育の内容は、発達の特徴が生得的、生理的な諸能力の発達

も含め詳しく記されている。その子どもが生活している環境、特にまわりのおとなとの温かく豊かな相互応答的な関係、子どもと保育士との間に情緒的な絆が形成されることや、自分を受け入れ、人を愛し、信頼する受容などが、第三章に「月齢、年齢による保育の内容」として書かれている。

配慮事項では、「(4)生理的諸機能の未熟性が強く、ときには疾病異常の発生や生命の危険につながることもあり、十分に注意して保護・世話をしなければならない。特に、おむつのあて方や衣服の着せ方、寝具の調節、保育室の温度や湿度の調整、安全の確保に心がけるなどをきめ細かく行う。」といった、排泄に関して具体的な記述をしている。

月齢が進み生後6か月以降、1歳3か月未満の子どもは、身近な人の顔がわかり、言葉がわかるようになり、乳児期から幼児期への移行を迎える。体外の豊かで変化に富んだ応答的環境の中で生活し、人間として生まれながらに持っている能力を社会的な環境に適応させながらうまく発現していく必要があることから、この時期は、極めて大切である。そして、言葉の理解と意志の伝達などの発達の特徴が、第四章「6か月から1歳3か月未満児の保育の内容」に述べられている。

ねらいにおいては、「(2)一人一人の子どもの生活のリズムを重視して、食欲、睡眠、排泄などの生理的欲求を満たし、生命の保持と生活の安定を図る。」

内容では、「(7)一人一人の子どもの排尿間隔を把握しながら、おむつが汚れたら、優しく言葉をかけながらこまめにとりかえ、きれいになった心地よさを感じることができるようになる。」

配慮事項では、「(7)食事、排泄などへの対応は、一人一人の子どもの発達状態に応じて、急がせることなく無理のないように行い、上手にできたときにはほめるなどの配慮をする。」といった排泄に関して具体的な記述をしている。

誕生1年を過ぎ2歳未満児のねらいでは「(5)安心できる保育士との関係の下で、食事、排泄などの活動を通して、自分であろうとする気持ちが芽生える。」

内容では、「(8)おむつやパンツが汚れたら、優しく言葉をかけながらとりかえ、きれいになった心地よさを感じることができるようになる。」「(9)一人一人の子どもの排尿間隔を知り、おむつが汚れていないときに便器に座らせ、うまく排尿できたときはほめることなどを繰り返して、便器での排泄に慣れるようにする。」

配慮事項では、「(8)排泄は、ゆったりした気持ちで対応し、子どもが自分から便器に座ってみようと思うような話し方、接し方をする。」と第五章「1歳3か月から

2歳未満児の保育の内容」に書かれている。

2歳児の発達の主な特徴、保育士の姿勢と関わりとの視点では、ねらい「(5)安心できる保育士との関係の下で、食事、排泄などの簡単な身の回りの活動を自分であろうとする。」

内容「(6)自分から、あるいは言葉をかけてもらうなどして便所に行き、保育士が見守りながら自分で排泄する。」

配慮事項「(2)食事、排泄、睡眠、衣類の着脱など生活に必要な基本的な習慣については、一人一人の子どもの発達・発達状態、健康状態に応じ、十分に落ち着いた雰囲気の中で行うことができるようにし、また、その習慣形成に当たっては、自分であろうとする気持ちを損なわないように配慮する。」、「(3)食事の前後、排泄の後などにおいては、自分で清潔にしようとする気持ちが持てるように配慮し、一人でできたときは十分にほめるようにする。」とほぼ排泄が自立していく過程を第六章「2歳児の保育の内容」では書かれている。

基礎的な運動能力や人間関係も一応は育っている3歳児では、食事・排泄などもかなりの程度自立できるようになってくる。第七章「3歳児の保育の内容」には以下のようにねらい、内容、健康の領域、配慮事項など詳しく書かれている。

ねらい「(5)食事、排泄、睡眠、衣服の着脱などの生活に必要な基本的な習慣が身につくようにする。」

内容〔基礎的事項〕「(4)食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。」

「健康」の領域では「(2)便所には適宜1人でいき、排尿、排便を自分でする。」

配慮事項〔基礎的事項〕の「健康」では「(1)身の回りのことは一応自分でできるようになるが、自分であろうとする気持ちを大切にしながら、適切な援助をするように配慮する。」

4歳児では自分でできることに喜びを持ちながら、健康、安全など生活に必要な基本的な習慣を次第に身につけるように書かれている。

内容〔基礎的事項〕では「(4)食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。」

「健康」「(2)排泄やその後の始末などは、ほとんど自分でする」

配慮事項〔基礎的事項〕「健康」では「(1)健康、安全など生活に必要な基本的な習慣は、一人一人の子どもと保育士の親密な関係に基づいて、日常生活の直接的な体験の中で身につくように配慮する。」と第八章「4歳児の保育の内容」である。

5歳児の発達では日常生活の基本的な習慣は、ほとんど自立し、自分自身でできるようになり、そばで見ても危なげがなくなり、頼もしくさえ思われてくる。と記されている。また、5～6歳までの期間に、昼間目を覚まし、夜間就寝する生活リズムが確立し、夜間の抗利尿ホルモン分泌量がさらに増え、膀胱の容量も朝まで尿がためられるように大きくなっていく。

内容〔基礎的事項〕「(4)食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。」

「健康」〔2〕排泄の後始末を上手にする。」

自主的に行動することができるように配慮することが、第九章「五歳児の保育の内容」に記されている。

乳児は6か月未満から快・不快の感情を確立し、おむつがぬれたという不快を快にかえてくれる愛情溢れる行為を繰り返し受け、すべてを受容してくれるおとなと信頼関係を作る。また、おとなはその子に応じた関わりを持ちながら、失敗しても受容する態度を持ち、相互に信頼関係を構築し、健康の基本的な生活習慣を身につさせ、子どもが自ら喜びを持ちながら育っていくことを保障し、自尊感情を育みながら生活の自立を促していく。

幼児の排泄の習慣は、時期が来れば自然にできることではなく、まわりのおとなが愛情を持って根気よく育て上げるものであるという。

V. 5年間の状況を比較した、おむつ使用の現状

1. 実態調査から²⁾

保育者のおむつに対する意識と、おむつ使用の現状を知るために兵庫県H市内の77保育園（所）の乳児保育担当者にアンケート調査をした。

調査の時期は1995年12月と2001年3月の2回で、アンケート回答者は158人と153人であった。20歳代が全体の57.8%、58.2%を占めている、若い人たちの職場という傾向である。

(1) 使用状況

1995年は紙おむつだけが39.1%であったのが2001年には75.2%になっていた。併用と布おむつ使用がともに5年間で半分以下のポイントになり、ほぼ90%が紙おむつを使用しているのがわかる。(図1)

家庭と園にいるとき布おむつと紙おむつの使用状況を比較した。(図2) 家庭にいるときの方が6.5%の差であるが、紙おむつを使っているポイントが高い。家庭での交換頻度は不明である。しかし、紙おむつ使用が多いことから交換頻度は少ないと推測で

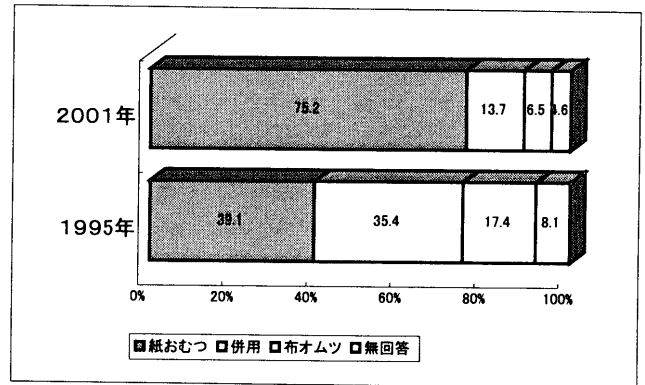


図1 保育中に使用しているおむつ

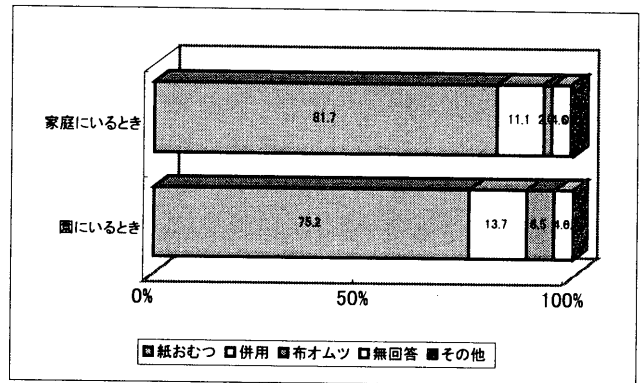


図2 家庭と園でのおむつ使用の種類

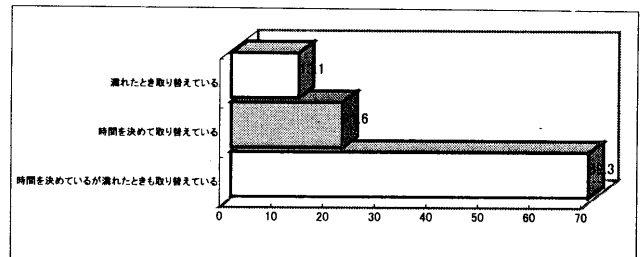


図3 保育中のおむつ交換 (園)

きる。また、経済的側面から見ても頻繁に交換できないのではないかと。(勝木, 2001)

(2) 紙おむつ交換の現状と排泄自立への時期

保育中のおむつ交換は約2時間の目安を持っているが、時間にこだわらず、ぬれていると気づいたときにもかえている保育者は69.3%あった。しかし、時間を決めてとりかえている保育者は21.6%あり、ぬれていてももれない紙おむつは時間が来れば交換すればいいという気持ちがあるように推測される。さらに、ぬれたときとりかえるのは13.1%あるが、紙おむつがぬれていなければ排泄を促すことが少ない。(図3)

複数の子どもと関わる保育士は一人一人の子どものサインを読みとるのが困難である。また、排泄があってももれない、むれないと思っているおとなの

安心感があり子どもがサインを送ったとしても、交換しないことが多いようである。そのような状態が恒常的になると、子どもがサインを送らないようになるのではないかと危惧する。

園で一日に使用する紙おむつは5枚までが75.3%であった。約75%の子どもたちが2時間おきに交換してもらっていることが予測できる、こまめにかえることによって排泄の自立につながる。(図4)

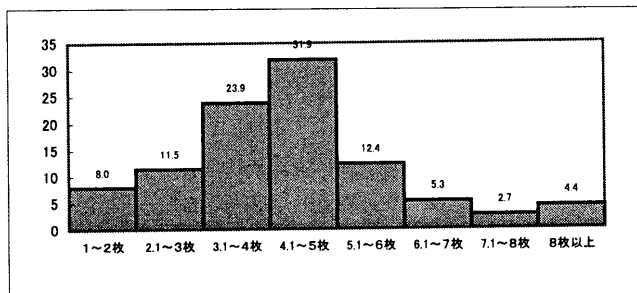


図4 一日に使用するおむつ

保育者が早い時期におむつがとれると感じている子どもの平均月齢は23.6か月(SD±5.5)、遅い時期におむつがとれると感じている子どもの平均月齢は36.8か月(SD±4.5)であった。その差は13.2か月であった。早い時期の子どもでは1歳前、遅い時期の子どもは4歳を過ぎている。(図5)

おとなとのコミュニケーション、応答やおとなから理解されることを求め、自分がおとなに理解されたように自分からもおとなを理解しようとするなど、子ども自身の発達、新たな態度や知識、能力を身につけていく過程である。また、子どもは、生理的・身体的な諸条件や養育環境の違いによって、

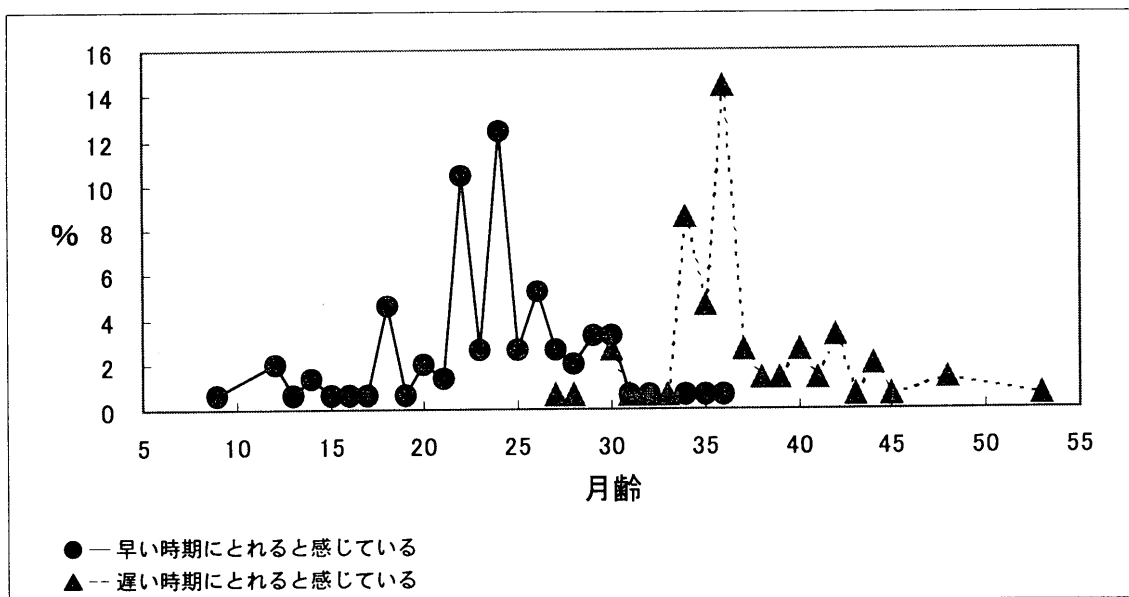


図5 おむつがとれる時期

その発達の進み方や現れ方が異なってくることを認識することが重要である。排泄を子どもの成長過程の中で真剣にとらえる必要を感じる。

(3) おむつに対するおとなの意識

世話をする側はおむつをどう感じ、また、される側の子どもにとっておむつをすることにどのような意識を持っているかをたずねた。それぞれよいと思った項目のうち10%以上の回答があったものを図に示した。

子どもにとって布おむつがよいと思うのは、ぬれたのがわかる64.8%、肌ざわりがよい55.2%、むれにくい34.5%であった。(図6)

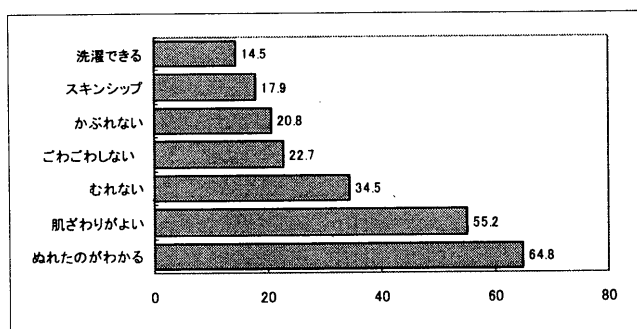


図6 子どもにとって布おむつのよいところ

感性を育てていく重要な時期に、自分の排泄でぬれたことがわかるというあたりまえのことではあるが、一位にあがってきている。ぬれて気持ち悪いことを感じるのが、おとなとのコミュニケーションとなり、交換して気持ちよくなったことを感じ、おとなとの信頼関係を構築する。

布おむつは木綿でできている天然素材である。何

回も洗濯し風合いのある布おむつはむれないし、肌着として気持ちが良い。

育てるものにとって布おむつのよいところは、経済性84.1%、洗濯51.7%できる、スキンシップの機会が多い39.3%、ぬれたのがわかる25.2%などであった。(図7)

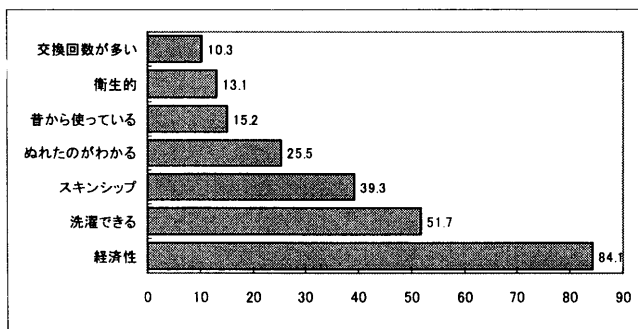


図7 育てるものにとって布おむつのよいところ

子どもにとってもおとなにとっても「ぬれたのがわかる」という項目があがっていて、子どもが自分の排泄感覚を知ること重要な意義があることに意識がある。

複数の子どもを育てると布おむつは使い回しされ経済性が高い。洗濯し日光にかけしおむつを干すことを、すがすがしく気持ちのいいものだととらえる人は多い。

一回の排泄でぬれたりむれたりする布おしめは、必然的に交換回数が増える。交換回数が多いことを、よいコミュニケーションの機会ととらえている。

子どもにとって紙おむつがよいと思うのは、もれない60.7%、さらっと感44.8%、ずれない36.6%であった。(図8)

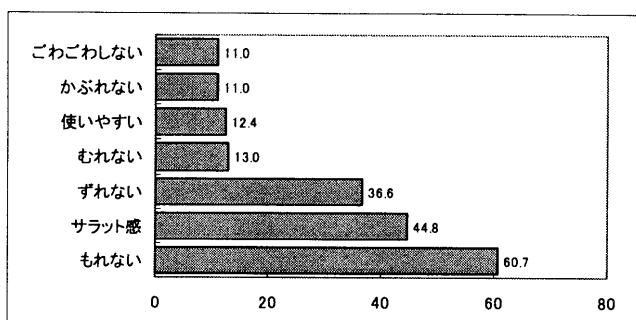


図8 子どもにとって紙おむつのよいところ

排泄があってももれずにさらっと感があり、ずれない紙おむつは、子どもにとって気持ちが良いものなのであろうか。不快な状態でも快の感情が育つのであろうか。

育てるものにとって紙おむつのよいところは、持ち運びに便利55.9%、洗濯しなくてよい49.7%、夜

間の交換回数が少ない33.1%、マークでぬれたのがわかる30.5%、などであった。(図9)

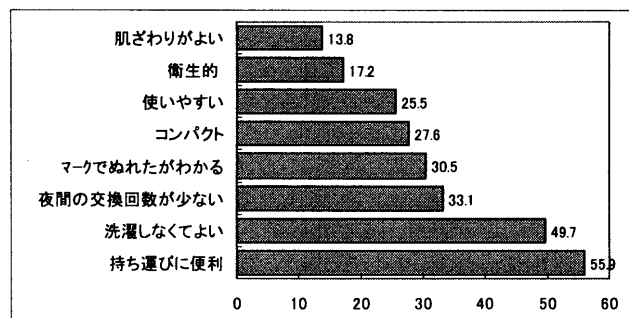


図9 育てるものにとって紙おむつのよいところ

コンパクトで持ち運びに都合がよく、外出中持っているものを使い果たしても、どこにいても手に入ることができる。育てるものは、ぬれた布おむつを持ち運びしたり、洗濯をすること、夜中に起きておむつ交換をすることなどの育児の苦痛から解放された。

排泄は、食事や清潔と同様に基本的な生活の大切な分野である。生活の重要な部分を占める排泄を、便利さだけの視点でよいのだろうか。

最近、紙おむつの中では排泄できるがトイレではできないとか、5歳を過ぎても夜の紙おむつが離せず子ども自身がつけたがるといった声を多く聞くようになった。ぬれたのがわかるマークのキャラクターに人気があり、「こんどはママに買ってこんなの買ってもらおう」と子ども同士の会話を聞くこともある。

また学童期の子どもがすると思うような大きさの紙おむつも市販されている。

子どもの生活は失敗や成功の繰り返しや、その中で自分の感覚の確認などの体験から、成功感を知っていくのだが、そうした体験ができていないことに不安があるといえる。³⁾

子育て(保育)とは、個々の子どものその時々あった応答関係や必要な援助、また適切な刺激を与えるものである。適時に体験しておかなければならないことがいろいろあるのに、まわりのおとなが利便性に流されてしまっている状況が予測される。例えば、親子の身体活動などを通してみると、以前とはいろいろな面で違ってきていることを感じる。快・不快の感情があるのかどうか表現しないから読みとれない、親子の信頼関係もぎこちないと思うことが多々ある。親は今子どもがどうして欲しいと思っているのか理解できないところがあり、子どもは子どもで親に対して必要なサインが送れないから、気持ちの行き違が多いのである。それらの原因や要因が、

表1 保育士が考える布おむつと紙おむつの比較(勝木・森川, 1997)

	布 お む つ	紙 お む つ
感情・感覚	気持ちよく過ごせる 気持ちよい感覚 不快を感じやすい ぬれた感覚がわかる	
スキンシップ コミュニケーション	たくさん話をする ゆったりとにこやかに大切な時間が多くとれる	子どもと一緒に過ごす時間を多くとってもらえるなら紙おむつでもよい
生理的発達の道筋	パンツへの切り替えが早い	でも知らせない おむつのとれる時期がかなり遅い
交換回数	回数多く替える 一度で替える	使用不可能時間になって替える つい安心してしまう 少ない・おろそかになる よく交換する必要がある
清潔・衛生	子どもの肌に合っている 清潔である アトピー体質の子によい むれないので臭わない	ただれやすい 通気性悪い おむつかぶれ
利便性	洗濯が大変 ゴミがでない	洗濯しなくてもよい 衣服を汚さない 携帯・外出に便利 下痢の時便利 後始末が簡単 便利さを優先してしまう
経済性	経済的	コスト高い
機能性	大きくなると間に合わない	横もれがない パンツ型もある 改良されてよい
その他		重い荷物をつけたまま動いている 2歳になってもしている子が増えている 夜十分に睡眠がとれる 夜したおむつをそのまましてくる

「紙おむつ」にあるというのは短絡的かもしれないが、コミュニケーションの積み重ねの量からいえば、無視することができない何かがあるのではないだろうか。^{2) 3) 4)}

(4) 保育中に主に布おむつを使用している保育者のおむつに対する考え方(事例)

- ・布おむつの方が子どもにとって、汚れて気持ちが悪い、とりかえてもらって気持ちよくなったことがわかっていいと思う
- ・気持ちが悪いことを気づかせこまめにとりかえたい
- ・排尿排便時の不快を感じやすいと思うので布の方がよい
- ・布おむつの方がよい。おしっこがでると気持ち悪いのを知らせてくれるし、パンツに切り替えるときも早いと思う。紙お

むつはおしっこがたくさんでていても知らせない。
・紙おむつでも十分交換してもらえるなら、現代の風潮から否定できない部分もあると思う。実際には布おむつでぬれた感触が嫌でおむつがはずれるようになったらよいと思う。

布おむつを使用している保育者は布おむつに肯定的である。しかし、現代の風潮として紙おむつを否定せず、交換回数が布おむつと同じくらいだと使用してもよいと思っている。

(5) 保育中に主に紙おむつを使用している保育者のおむつに対する考え方(事例)

- 紙おむつは便利であるがぬれたときの感じが違う、感覚がわからないのでなかなかパンツに切り替えられません
- アトピー体質の子のことを考えると布おむつの方がよいと思うが、現実としては紙おむつの便利さを優先してしまう
- 最近の紙おむつは吸収力がいいので、夜したおむつをそのまましてくる子が多い
- 子どもたちはほぼ同じ時期におむつがはずれていくという生理的発達の道筋をたどっていたが、紙おむつが普及して、おとなも後2回くらいは大丈夫という便利さから、子どもの立場からでなく、おむつ使用可能時間がくれば交換するということになりつつある。おむつのとれる時期も以前に比べればかなり遅いのはいうまでもなく、交換時における快・不快の親子共通のスキンシップ体験感動が希薄になってきていることは、人間関係形成上少なからず影響があるかもしれないと思う。

紙おむつを使用している保育者は使用することに肯定感は少ない。感覚やスキンシップ、おむつがはずれる時期など、できれば子どものために布おむつを使いたいと思っている。親の養育態度に疑問を感じているが、利便性を優先している。

(6) 保育中に主に併用している保育者のおむつに対する考方(事例)

- 紙でも布でもどちらでもいいと思う、基本的には各家庭の考え方による
- 経済的に考え布と紙を使い分けるとよい
- できる限り布おむつにしたい、ぬれたということがわかるので
- 時間的に余裕があれば、経済的にも布おむつがいいと思う
- おむつには布がいいと思うが仕事を持つお母さんも少なくなし、子どもと一緒に過ごす時間を多く持ってもらえるなら紙おむつでもいいのではないかと
- 最近の紙おむつも通気性のよいものやトレーニングパンツより子ども自身はきやすいパンツ形式のものもあるので一概に布おむつがよいとはいえない。ただ、紙おむつはこまめにとりかえないとただれの原因になりやすい、便を拭くときは布おむつできれいに拭くようにしているので必ずお尻ふき用に数枚持ってきてもらう。

布おむつと紙おむつの併用をしている保育者は、使い分けや家庭の考え方に委ねている。また、両方の利点を述べている。

(7) 保育士が最近の子育てを見ていて感じていること。(年齢、経験年数)

- 排泄はコミュニケーションの一つといわれるが、全く感じられない。ぬれていてももう少しいいかなとそのままにしたりしている。それではいけないことかなあと思う。(20~24. 3)
- どれくらいで交換するのか、少しぬれていても「これくらいなら平気」的対応をされるお母さんが多い(35~39. 3)
- 保育所では布パンツなのにお迎えに来たときから紙おむつに

してしまうお母さんが多い(20~24. 2)

- 子どもの排尿がわからない母親がいる。排便していても保育園に来てると保育者がするのがあたりまえのように「先生、でている」と子どもを手渡す母親がいた(30~34. 10)
- 育児不安や悩みを持つ親、子どもへの接し方がわからなかったり、友達感覚だったり、親の年齢が若いほどそういったことが感じられる(25~29. 8)
- 子どもをベッドのような感覚で可愛っている、いうことを聞くときは可愛いすが、そうでなくなると可愛くなるようだ。(35~39. 14)
- 親の都合が優先されすぎている。子どもにとって何が大切なのか考えていない。(30~34. 10)
- 神経質すぎる親、子どもが勝手に大きくなると思っている親、子育ての方法がわからない親、極端なことがある。(40~44. 22)
- 子どもの成長に関心がない。歩行、言葉、排泄、食事など。(30~34. 10)
- 価値観が多様化していて、自分本位である。子育てに自信がない。核家族。(40~44. 12)
- 情報が氾濫していて自分の子どもの発達をしっかり受け止められない。(30~34. 12)
- 親の生活に振り回されることが多いように思う。
- 母子関係が薄くなりつつあると思う。(20~24. 3)
- トイレトレーニングをしようと思わず園に任せている。(25~29. 5)
- 子育ての楽しさがわからない人がいる。子どもの可愛さ、一生懸命な姿の愛しさがわかっていないように思う(35~39. 15)
- 園と家庭の方法にギャップがある。(25~29. 5)
- 子どもをほめたり叱ったりすることができない人が多い。(35~39. 7)
- 時代の流れには逆戻りできない。理想をいっても聞いてもらえないなら、それは意味のないことだと思う。(40~44. 21)

おむつ使用を通して保育者が親の子育てをどう感じているかを聞いた。紙おむつ使用が多数を占めている中で、子どものおしめがぬれていても平気な親の態度、それらが原因と思われる育児能力の低下、親の都合が優先されていることをあげている。また、育児不安や育児放棄につながる無関心、子どもの心や成長をしっかり受け止められていない親の養育態度がおむつ使用を通してうかがえる。

V. おむつと地球環境

1990年に乳幼児用布製おむつは、財団法人日本環境協会エコマーク事務局からエコマーク対象商品として認定されている。

布おむつはリサイクルおむつで紙おむつは使い捨ておむつ、ということは理解していることであるが、その違いを明確にしようと試みた。

(1) 素 材

布おむつは、さらしやトビー織など綿100%でできている。形状は輪状、長方形、たたむ手間もいらないコンパクトなパット状の成型タイプなどがある。

布おむつは成長に関わらずワンサイズであり、おむつを止めるためにおむつカバーが必要である。おむつカバーは新生児用はウールが多い。最近はフリース素材もある。

紙おむつは、高分子吸収体、紙パルプ、不織布、プラスチック、化学物質、香料、ポリウレタン、天然ゴム、ホットメルト粘着材、ポリプロピレン、ポリエチレンフィルムなどを使用している。石油からできた優れた性能を持った製品である。

幼児が使用前でも紙おむつを口にしたとき(食べてしまったとき)、肌に高分子吸収材がついたとき、高分子吸収材が目に入ったときなどがあれば危険性がある。

(2) 使用後の処理

布おむつは、水を張ったふたつきバケツに漂白効果のある重曹などを溶いておき、つけおきをした後、洗濯をする。洗剤は、粉石けん(合成洗剤ではない)と、柔軟剤と臭い消しとして食酢を使っている家庭が多い。(干すときは酢のおいが気になることがあるが、乾燥とともに消失する。)

特に塩素系漂白剤などの成分は濯いでも衣類に残り、皮膚から吸収され内臓に負担をかけるのではないかという不安がある。漂白や消毒をしなくても天日干しで十分殺菌効果はあるといわれている。また、除湿器や扇風機の風をあて乾燥させると、早く乾くので天日干しなみの殺菌効果があるといわれている。

柔軟剤(界面活性剤)は環境汚染を起こし、特におむつカバーの防水が切れる原因にもなるので使用しない家庭が多い。

紙おむつは、使用后ゴミとして排出され焼却処理される。焼却処理は環境問題や地球温暖化の一因になり、ダイオキシンの問題やCO₂排出の問題が発生する。ダイオキシンやCO₂排出の抑制は、焼却処理に関する規制や設備基準の強化となり処理費用の高騰につながっていく。ゴミの最終処分場不足の問題もある。それが、紙おむつ使用者の経済的、精神的負担となっている。

(3) 環境への影響、使用済み紙おむつを取り巻く背景 ゴミ問題

布おむつはゴミにならないので、洗濯のときに洗剤の量や種類などに気を配ってさえいれば、環境への負荷もかからない。例えば、洗濯に風呂の残り湯

を使用する。洗濯はなるべくたくさんのものと洗う。予備洗いの水をトイレに捨てる。といったことをするだけで環境負荷が3割程削減できるといわれている。

紙おむつは、使用后すべてがゴミになり廃棄するため消費者側で環境負荷を減らすことが難しい。また、便を入れたままゴミに出すといったマナーの低下から、生ゴミ回収時の清掃作業をする人間への衛生上の問題がある。自宅でゴミが溢れるのを嫌がって公共施設のごみ箱や大型商店のごみ箱へ投棄する社会性の育っていない使用者もいる。

家庭ゴミ全体に占める紙おむつ(おとな用も含む)の量は、1999年度京都市環境局の調査によれば、容積比で3%、重量比で6%前後と報告されている。一方、1995年に公表された日本衛生材料工業連合会の報告によれば、全国のゴミ総排出量に対する使用済紙おむつ全重量(平均含水率60%)の占める比率(重量ベース)は1.3%と推計されている。

紙おむつの生産トン数は、1997年の子ども用266千トン、おとな用110千トン、合計376千トンをピークに子ども用紙おむつは、減少傾向にあり2000年には、206千トンとなっている。

おとな用紙おむつは、1997年110千トンから2000年には134千トンと増加しており、毎年10%台の伸びがあり、少子高齢社会の傾向が紙おむつの動向からもみえる。

子ども用紙おむつ54億5,182千枚、おとな用紙おむつ23億16,512千枚合計77億68,332千枚が生産されており、使用后廃棄される紙おむつ重量(使用前の4~5倍の重量)子ども用紙おむつ1,030千トン、おとな用紙おむつ670千トン合計1,700千トンが、廃棄物として焼却処理されていることになる。

紙おむつの増加はパルプ使用量の増加であり、パルプ使用量の増加は、森林伐採等を進行させることになる。そのことは、環境破壊と地球温暖化を加速させることにつながる。

VI. ま と め

育児用品であるおむつの使用状況を、成長していく子どもに視点をあて考察を試みた。

紙おむつの歴史的背景は企業の歴史でもあり発売以来25年を経ており、子育てに紙おむつ使用があたりまえの状態になった。

平成4年に「少子化社会の到来」といわれ、子どもという価値が生産財から高級消費財となり、育児用品に変

化がおきた。

乳幼児の成長を保障する基準を見るため、保育所保育指針の中に書かれている排泄関連事項を取り上げた。

2回にわたる5年間の実態調査から、保育者からおむつ使用の現状を聞いた。子どもの成長とおむつは、感覚やスキンシップといったコミュニケーションにおいて大切なことだと感じていた。また、おむつを通して親の意識や養育態度の考察を求めた。

布おむつと紙おむつを素材、使用後の処理、ゴミ問題から環境を考察した。

おわりに

「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について（新エンゼルプラン）」、「待機児童0作戦」などの国の子育て支援施策も受け、0歳児保育が急激に充実してきた。それらの政策の充実働く女性にとっては大変喜ばしい状況である。男女共同参画社会が推進される状況であるが、働く女性が増加しても、ともすると家事育児の負担もその肩にかかってくる。平成14年度女性雇用管理基本調査では男性の育児休業取得率は0.33%といわれている現状である。家事や子育てを一手引き受けなければならない状況で、育児に手間を省きたいと思う女性の気持ちはもっともである。¹¹⁾

しかし、子育ての省エネ化は、子どもの不快や快感を親が共有しつつ子育てをすることも省エネ化してしまう。

紙おむつ時代のおむつは、「ぬれたらとりかえる」ものではなく「時間でとりかえる」「2～3回たまったらとりかえる」ものとなっている。

布おむつの時代、親や養育者は子どものおむつがぬれているかどうかを、おむつについたサインマークがなくてもわかることができた。開けてみてぬれていなければおまるにかけさせて排泄を促し、ぬれていると、「あ、気がつかなくてごめんね。気持ち悪かったねえ。さ、おむつ換えようね」、「気持ちよくなったね」などと、ゆったりした親子の関わりがあった。子どもにこんな語りかけをしながらおむつを換えるのが常であった。

布おむつと紙おむつと対局化することではなく、子どもを中心とした子育ての中で、どのように排泄の習慣をつけさせ、トイレで排泄できるようにするか、そのプロセスが大切でなのである。

それは、人間が社会参加していく上で守らなければならない社会的ルールである。子どもは自然にこの社会的ルールを身につけていくわけではないから、子どもの環境としてのおとなが関わりっていくことが必要である。適切な対応によって、体と心の排泄機能は健全に発達して

いくことができる。

近年おむつかぶれが増加しているという話は聞かない。(丹羽, 1999) むしろ、紙おむつ使用でおむつかぶれが減ったとさえいわれる。交換回数が少なくても皮膚トラブルはないようである。それだけ今日の紙おむつが優れた性能を持った製品であることが証明されている。

おむつの種類と排泄の自立や皮膚生理との関わりはどのようなのか、どのような使い方をするのが望ましいのか。こうしたことについて母子保健に携わる人たちは育児指導の場できちんと語ることは必要であろう。

おむつは、子どもの感性を育てる第一歩とでもいうべきものである。おむつを外すという育児作業は一つの文化で、子育てに関わるものはおむつという文化をどう考えていくか、重要なことであると認識したい。

赤ちゃんのおむつは何歳で外すのがいいか、そんな問題が米国で盛んに論議されている。「焦って無理に外させるのは禁物」という説が長く信じられていたが、「2歳で一気に外させるのがいい」という考えが急速に支持を広げてきた。対象年齢を縮めたくない紙おむつ会社の思惑も絡んで結論はすぐにでそうにない。(1999年10月9日朝日新聞)そして、多くの人がおむつといえば紙おむつと連想するほどその使用が一般化してしまっている。

子育ての不安、幼児虐待が増加する中で、環境としてのおとなの関わりが重要である。子育てしている人が育児不安を感じることなく、子育てが楽しいものだと思います。おとなからの愛をいっぱい受けて成長する乳幼児の成長を願ってやまない。

謝 辞

姫路日の本短期大学森川紅先生には乳児保育について多くの示唆をいただき、姫路市保育所連盟の公立保育所・私立保育園の乳児担当の保育士の方々には、二度にわたる調査にご協力していただきました。心より感謝いたします。

参考文献・資料

- 1) 小島正美 井口泰泉 1998 環境ホルモンと日本の危機 東京書籍
- 2) 勝木洋子 1996 保育所におけるおむつ使用について — 布おむつ、紙おむつの使用と保育者の意識 日本保育学会第49回大会年5月
- 3) 勝木洋子 森川紅 1997 保育所におけるおむつ使用について — 保育者の意識と現状 — 研究報告第42巻第2号姫路短期大 pp.11-17
- 4) 勝木洋子1997 おむつに関する保育専攻学生の意識 全国保母養成協議会第35回研究大会
- 5) 恒吉僚子・S.ブーコック 1997 育児の国際比較 日本放送

出版協会

- 6) 丹羽洋子 1999 今時子育て事情 ミネルヴァ書房
- 7) Yoko Katsuki 2001 The use of cloth and disposable diaper in Day Care Centers : Caregivers' awareness and current practice Pacific Early Childhood Education Reserch association New Zealand
- 8) 国民生活白書 1992 <http://wp.cao.go.jp/zenbun/seikatsu/wp-pl92/wp-pl92-02202.html>
- 9) 社団法人 日本衛生材料工業連合会基礎資料 乳幼児用紙おむつの歴史URL : <http://www.jhpia.or.jp/diaperqa/index.html>
- 10) 総務省統計局 URL : <http://www.stat.go.jp/data/roudou/index.htm>
- 11) 「平成14年度女性雇用管理基本調査」結果概要育児休業制度及び介護休業制度等の実施状況厚生労働省平成15年7月17日発表 URL : <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/07/h0717-1.html>
- 12) 王子ネピア株式会社沿革 URL : <http://www.nepia.co.jp/company/enkaku.html>
- 13) 大王製紙会社概要沿革 URL : <http://www.daio-paper.co.jp/company/index.html>
- 14) パンパースの歴史 URL : http://www.pampers.com/ja_jp/products/history/history.html
- 15) ユニチャーム会社内容沿革 URL : <http://www.unicharm.co.jp/company/index.html>

(平成15年10月14日受付)